久遠の鏡

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
久遠の鏡

【Ｎコード】
Ｎ４１１１Ｄ

【作者名】
神宮寺飛鳥

【あらすじ】
高校最後の冬を迎えた少女、香木原アヲイ。少女はこの冬、どうしても成し遂げたい殺人があった。自らの父親を殺害する・・・長年の夢であり、絶対に成し遂げなければならないと自らに課した必然。アヲイは父親を殺す為、都市伝説である『殺人代行サイト』にメールを送る。その日から徐々に少女の日常を狂気が浸食し始める。一方、遠く離れた町でホストとして働く少年、赤井クレイは何者かに命を狙われていた。正体不明の殺人者。そして次々に遭遇する殺人現場。自らに迫る危機に対し、少年は・・・。

クラキユメ／メユキラク

「もし、仮にだけど・・・・この世界に自分と全く同じ心・・・いや、何もかも・・・そうだな・・・色、みたいなものが同じ人間が居たとして」

真冬の空。印象に残っているのは彼の横顔。
町を一望する峠。輝きの海を見渡すフェンス。天地すら忘れさせるような風。頬を切り裂くような冷たさのそれを彼は気持ちよさそうに受けて笑う。
細める目。いつもどおり、不気味なくらいに爽やかな笑顔。その瞳の向こう側、何かが私の心を覗き込んでいる。
不快感が喉の奥から競りあがってくる。恐ろしいまでの憎悪と強烈な嫌悪感の嵐の中、その中から微かに覗く好意という狂気的な感情に私は自分自身を愚かしい女なんだと実感せざるを得ない。
常に彼はそうして私の何か一歩上、考えも寄らない、理解し得ない何かを見通していて、降り注いで来そうな星の海の下ですら彼はその輝きを失う事も無く、漆黒の中でむしろ輝きを増すような・・・そんなどす黒く儚くて醜くて・・・でも美しい。人を引き寄せる何か。途方も無い、私にはどうしようもないような何かを。
唇がゆっくりと動いて言葉を紡いだ。

「もしも自分と同じ人間が居たら・・・・お前、どうする？」

私は答えない。一々彼の質問に答える義理もない。彼が私にした事を思えば当然のことだった。
唇を指先でなぞった。何故そんな事をしてしまったのかわからない。

ただ『しまった』とだけ思った。彼はそれだけで私の思考を見透かす。

「まだ気にしてるのか？オレがキスしたこと」

そう、私自身が気づいていないような、そんな思考ですら。

「別にそんなこと・・・・非常識なあなたに憤りを覚えたところで・・・・酷く無意味ですから」

背を向けた。自分自身がそれを気にしすぎてしまっている事。そして自分の胸の中にある見透かされている事への複雑な心境がそうさせていた。

彼はそんな私の態度を気にせず言葉を続ける。振り返る事も無く、フェンスの向こうの星の海に向かって。

「オレだったらきっと、愛してしまうと思う。この世界で自分自身より愛しいものなんてない。だからオレはきっと愛してしまう。心のそこからそれを愛してしまうだろう・・・・・」

言葉が止まった。振り返る。彼がどんな顔をしているのか気になってしまったから。

でもそれをあらかじめ予見していたかのように彼もまた私の事を見ていて、思わず息を呑んだ。

星の海を背にして語る彼の姿は男性経験皆無な私にだって判りすぎるくらい、酷く魅力的だったから。

「そう・・・・・・・きっと、殺してしまいたいくらいに・・・・愛するだろうな」

それだけ呟いて彼は微笑んでいた。
長い、長い髪。結っていた女物の黒いリボンを解き、その長い髪を風に靡かせていた。
その表情は隠れていて良く見えない。ただそれは私にとって見なくてもいいものだと思った。
きっとその表情を知ってしまったら私は逃れられなくなる。何もかもを見透かしてしまうようなあの瞳から。
胸の奥から湧き上がる感情はきっと恋と呼べるものなのだろう。認めたくないけれどきっとそうだ。
ドロドロと漆黒のコールタールの海の中から這いずり出てくるようなこの感情は、きっと愛だ。
そう、だからきっと仕方ない。仕方ないと分かっているのに、ソレを認めたくない。認めてしまったら私の全てが終わってしまいそうで。

「・・・・・・・・そうですね・・・きっと・・・愛するでしょうね・・・私も」

なのに身体はそれに従ってくれなくて。
顔を上げて彼に歩み寄っていて。
全てを見透かすように彼は微笑んでいて。

胡散臭くて、でも温かくて、人に居場所を与えてくれるような、そんな微笑み。

「私もきっと殺したくなると思います・・・・だから」

左手に握り締めていたそれを振り上げた。

「いいですよね・・・・？」

自分の頬が冷たく引き攣るのを感じていた。

振り上げた銀色の光を反射する美しい刃。月を写し込み、鮮やかな華のように輝いて。

匂いすら香るようなその美しさに身を預けるように、それを振り下ろした。

久遠の鏡

だから始まりはずっと昔。私が私になってしまうよりも前に。

私を愛しにきて。

コドクナヤカタ／タカヤナクドコ

教室の窓際最後列の席からの眺めは常に最高。
私、香木原（かぎはら）アヲイは学校と言うものが大好きだ。
理由はシンプル。そこにはたくさんの人間が居るから。
人間と言うのは見ていて飽きない。良くも悪くも個性的であり、それぞれ感情があり、思考があり・・・とにかく人間と言う生き物は筆舌に尽くしがたい程多種多様であり、常に私の好奇心を満たしてくれる。
例えば今黒板の前でたむろしている女子三人はファッション誌を開いて雑談を楽しんでいる。その姿は他人からの視線やそれらへの迷惑を考えていない大胆不敵・・・悪く言えば非常識な態度だ。大声で笑い、喚き、随分と楽しそうだが席について勉強している生徒の事までは頭は回っていないだろう。
その席について勉強している男子は非常に迷惑そうに被害者的な表情を浮かべているが、実際彼は今日この後の授業の課題を忘れ、そして今正に友人にそれを借りて丸写しをしている最中。
その課題を貸して上げた友人は黒板の前でたむろしている女子に好意でも抱いているのか、先ほどから真剣な眼差しでそれを眺めていた。
何気ない日常でも何となく滑稽で、人間というのはとても面白い。
いくつにも重なりあった偶然が奇跡のような演出を生み出し、舞台を輝かせる。
とは言え私はそれらとはかかわりのない人間だ。まず友人と呼べるものが存在しない事が理由にあげられる。そして自らそれらを拒んでいるという事も理由にあげられるだろう。
厳密には拒んでいるのではなく、友達を作りたくても作れないのだ。
私は交友関係というものが酷く苦手だった。
今まで何度となく声をかけてもらう機会はあったものの、全て言葉

を濁すか拒否してきた。そういう生き方が私の生き方らしい。
椅子の上に行儀よく腰掛けてそれらを眺める。飽きたら窓の外へと視線を移す。
先日二月を迎えたばかりの冬の空はまだ肌寒い。教室内が温かいのは暖房が効いているからか。それとも人が多いからなのか。
何はともあれそこにあるまだ当分花を咲かせることはないであろう桜の木を眺めながら私はそっと思考を切り替えた。

コドクナヤカタ／タカヤナクドコ

Ｓｉｄｅ：ＢＬＵＥ

もっぱら私が人間観察以外に考えることといえば殺人の事だ。
自分でも随分と危険な趣味だと思うけれど、実際それ以外に考えることも無い。それに殺したい相手も一人しかいなかった。
私の実の父親。それが私がどうしても殺したい人間だった。
何故殺したいのかという理由はちょっと考え付かない。理由がありすぎてむしろどれが本当の動機なのか私にも分からないのだ。
ただとにかく何としても今年こそは殺す、殺すと考えて早十八年。
先日誕生日を迎え、いよいよ高校三年生になっても殺す事は出来なかった。
このまま行けば大学生になってしまうだろう。そうしたらそれから先も今年こそは殺す、今日こそ殺すと言って日々がなあなあに過ぎてしまう・・・そんな予感がしていた。
どうすれば殺せるだろう？いつもそれを考える。いい方法があればすぐにでも試してみたいのに、考え付くのは下らない案ばかり。
あの男の首が跳ね飛ばされて地べたに臓物がはじけ飛ぶのを眺められたらどれだけ胸がすっとするだろう。ああ、想像しただけで楽し

くなる。
なのに殺せない。何故なのだろうか。むしろこんなの理不尽だ。そろそろ死んでもいいだろう。そう思う。
授業が始まる。今日最後の授業。何はともあれ私は教科書を取り出した。ノートに描くのはあいつを殺すための手段だ。
いつもそんな事ばかり考えているから私の現代国語のノートは箇条書きの文章で埋め尽くされていた。『階段』とか『包丁』とか、そんな一見したらわけのわからない単語たち。しかしそれを見るだけで私は一連の殺害までの動作を連想し楽しくなる。そんな単語たちがノートにはぎっしりつまっていて、開くだけで私にとっては至福の時間を提供してくれた。
ただそうしてぼんやりしていると教師はやはり面白くないのだろう。自分でも申し訳がないくらい授業はそっちのけだ。だから教師はわざと私を指す。この問題を解けとか、さっきいったところを読め、とか。
だから私はそれをこなして席につく。そんなことは問題ではない。わかってもわからなくても別に関係ないが、私にはわかる。というか、『カン』だ。
何となく今日も言われたかなと思う部分を読み上げて席についた。教師である若い男は舌打ちを一つ残して私を解放した。
ノートに再びペンを走らせる。ああ、この場所だけが私の許された安楽の地。最後の最後、世界が終わっても残された約束の地だ。そこでなら何度でもあの男を殺せた。何度でも何度でも。一番苦痛であるように。内蔵を引っ張り出し、四肢を切断し、顔面に釘を打ち。
ああ、何て楽しいんだろうか。背筋がゾクゾクする。快感の波が喉の奥で熱く渦巻いている。早く実践したいなあ。想像は想像でしかないわけだし。
一日はあっと言う間だ。楽しいからかもしれない。勉強も楽しいし、運動も、下らないやり取りも、イベントも大好きだ。楽しくて仕方

がない。もっとも、このノートには適わないけれど。
ホームルームが終わって立ち上がる。鞄を背負って家に帰るだけ。
ただそれだけのはずだったのに、今日は普段と違うイベントが起きてしまった。

「ねえ、いつもノートに何を書いてるの？」

声をかけられた。思わず反応できなくなる。しかもよりによってノートのこと。
振り返った。そこに立っていたのは私よりも頭一つ分は小さい少女だった。無論クラスメイト。真っ黒い長髪を左右で結んでいる。くりっとした目つきが愛らしい。あとは名前か。名前。ああ、わからない。困ったな。
そんな私の態度を読み取ったのか、おかしそうに笑って少女は自らの胸に手を当て、答えた。

「あたしは愛染レン。前の前の席だよ？」

「そう・・・・ですか？すみません・・・その・・・」

どんな人間かは見て知っているけれど、名前なんて知らないものだから困ったものだ。
レンという少女は私の机の上に唐突に腰掛けると優しい笑顔で言う。

「香木原さん、すごく成績優秀でしょ？授業中にやにやしてノート取ってるからどんな風に書いてるのか気になっちゃって。あたしほら、成績悪いんだあ、ばかなんだもん」

自分で言うほど彼女はバカでもない気はする。成績は実際悪いのだろうが、バカかどうかというのは大きな違いがある。

まあそんな事を急に語りだしたところで彼女にも理解出来ないだろうしせっかく声をかけてくれた少女の気を害する必要もない。ノートを取り出して少女に手渡した。

「見てもいいの？」

「構いません。と言っても、見たところで・・・」

あなたには分からないでしょうけどね。
それを見て少女がどんな感想を抱くのかはわからないが見たいというのなら見せる。私は別に悪い事をしているわけではないし、所詮他人が見たところで理解できるはずが、

「これ、殺人計画でしょ？」

思わず驚いて表情を崩しそうになった。無表情なのが自分のいいところだと思っているのに。
悪いことをしているわけではないと思っていたはずなのに、悪戯がばれた子供のように心臓が高鳴っている。いや、待て、どうして？

「何故・・・・分かったんですか？」

「さぁ、何でかなあ・・・・・でもこれ、人殺しのレシピだよね。うん。こことこことか繋がってるし。香木原さんってちょっと変わってるね」

「そう・・・・でしょうか？」

多分今私の顔は赤くなっていることだろう。恥ずかしくて紅潮するなんていつぶりだろう？少女はそれ以上私をせめるでも追求するで

もなくノートを返すと立ち上がった。
短いスカートを翻しながら振り返り、愛らしい笑顔を浮かべて去っていく。

「それじゃまた明日ね！ノート見せてくれてありがとっ！」

「はい、それではまた」

胸がドキドキした。何だかとても幸せな気分だ。あの子は私の心の内に渦巻いている様々な悪意を理解してくれた。
それがたまらなくうれしかった。なんだか窓の外に飛び出して空へ飛んで行きたい気分。晴れやかな心境。涙すら流れそうだ。
なのにこれから家に帰らなければならないと思うと憂鬱で仕方がなかった。とにかく家には帰りたくなかった。
そう、学校が楽しいのはきっと・・・『家じゃないから』・・・という理由も含んでいるのだろう。
だから私は寄り道もしないで真っ直ぐ家に帰るくせに、その足取りは酷く重かった。私の中の様々な感情が足を引っ張り、学校へと連れ戻そうとする。
それは許されないことだ。だから私は大人しく歩き続けた。最も忌み嫌う場所へ帰るために。

そこは学校から二駅下ったところにあった。洋館が並ぶ古くからの高級住宅地の一角にそれはある。
他の洋館と比べても明らかに異常な大きさのそれが私の住む場所だった。真っ黒い外装はむしろ恐怖の館とか呪いの館を連想させる。
吸血鬼（ヴァンパイア）なんて気の効いたものは住んでいないけれど、一般人が立ち入ったら退屈しないことだけは間違いない。
巨大な門、薔薇の花の海、折り重なった無数のアーチを潜りぬけ、歩いて十分。ようやく玄関に辿り付いた。

「・・・・・・・・入りたくない・・・」

心の底から願う事は口に出てしまうものなのかもしれない。溜息と一緒に零れたその言葉を私は心底肯定する。
それはきっと心のうちより吐き出された空白の一言だ。私という存在が全身全霊を持って語る無意識が『入りたくない』と言っているのだ。
だというのに待ち構えていたかのように・・・いや、実際待ち構えていたのだろう。扉は開き、そこから金髪の少女が顔を覗かせた。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「・・・・・・・・た、ただいま」

玄関へ案内される。私にとってこの家の全てだ。広すぎる玄関。そこからあるのはまずエントランスだ。螺旋階段が昇る吹き抜け構造のエントランス。高級ホテルか何かをも思わせるシャンデリア。淡い光量の古びたランプ。並ぶ職台の羅列。何もかもがここが日本という国であることを忘れさせてくれる頭痛がするほど素敵なシチュエーション。
そして私を迎えてくれた少女は黒いエプロンドレス・・・平たく言うとメイド服を着込んでいた。勿論コスチュームプレイなどではなく、本物のメイドだ。
役職としてこの家に住み込みで働いているメイドである彼女。私は彼女の名前を知らない。知らないから『彼女』でいいし、『メイド』でいいだろう。
私が帰宅すると私が抱えていた鞄を預かり、会釈してから私のネクタイに手をかけた。
するすると解かれていく。それから彼女が取り出したもの。既に見

慣れてしまっているわけだが、これが恐らく一般人が驚くであろう風習だ。それも恐らくは、我が家だけの。

「失礼致します、お嬢様」

私の反応とかＹＥＳなのかＮＯなのかとかは関係ない。彼女は取り出したそれを・・・・銀色に鈍く輝く『手錠』を、片方自らの腕に装着した。

がしゃんと音を立てて絞まる錠の音。そしてもう片方は私の肩手首に。もう諦めているので何も言わずそれを受け入れた。

それからメイドは私の両足を結びつけるように手錠を嵌める。間にある鎖が多少長いため歩くのには不自由はないが、走る事は絶対に出来ない。

それから私の首に首輪をつける。そこから伸びている鎖を持っているのも、勿論メイドだ。私は反論せず目を閉じてそれをつけさせる。

最後は目隠し。メイドは黒い帯を私の瞼の上にそっと巻いていく。幾重にも重ね、完全に光が差し込まなくなると私は思わず溜息をついた。

「毎日毎日、本当にご苦労様ね・・・」

「いえ、仕事ですから」

嫌味を言ったつもりだったのだが彼女はそんな事はまるで気にしない。あっさり受け流されてしまった。

「本当、嫌になるわ・・・」

歩き出す。メイドは私を導くようにゆっくりと、本当にゆっくりと歩いてくれる。

私が躓きそうになれば身体を支え、傍に常に居て私をサポートしてくれる。
私の部屋は・・・多分階段を上ったあたり・・・何階かは全くわからないけれど、とにかく階段を上った先にある。
実は自分の部屋と言うものを見たことがない。常に私は目隠しされているし、それを外すことは絶対に許されないからだ。
部屋の鍵を開ける音が聞こえた。中に導かれると既に暖炉に火が入っていたのか、温かい空気が迎えてくれた。
ベッドの上に導かれ、そこに腰掛ける。メイドは自らの手錠を外し、ベッドの足にその手錠をはめた。これで私はベッドから一歩も動けない。

「本日のお召し物は何に致しましょうか？」

何といわれても、結局見えないから意味もないんだけど。

「何でもいいわ。見繕って頂戴」

「畏まりました」

クローゼットが開く音。メイドはそこから私の私服であるドレスを取り出してくれる。私は立ち上がった。
片手はベッドに拘束されている。服も自分では脱げない。メイドは私のネクタイを緩め、制服を丁寧に脱がしていく。
肌が露出し直接大気に触れるとやはり寒かった。そしていよいよ一瞬だけ、着替える一瞬だけ腕の手錠が外される。

その瞬間を見計らい、私は彼女を押し倒す。目が見えなくたってわかる。彼女がどこに居るのか。
隠し持っていたナイフを取り出して首筋に突き立てる。見張りが居

なくなればあとはこっちのものだ。
あの父親を殺すためにはまずこの女を殺す必要があるのだから、私が彼女を殺すのは必然だ。
ナイフを取り出して首筋に一撃。吹き出る鮮血は私の黒いドレスをより黒く、赤く染めるだろう。

「コルセット、きつくはありませんか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・うん」

まあ、そんなのは当然妄想だ。私は大人しく着替えさせてもらうことにした。
普段から恐ろしくヒラヒラしたドレスを着用させられる。私の私服はドレスしかないのだ。
着替えを終えると手錠は再びベッドに嵌められる。首輪もまたベッドに。着替えるだけで一苦労な私としては、すぐさまベッドに横になりたい。
ふかふかのベッドの上に寝転がる。何も見えないけれどここだけは多分私に自由が許されている場所だ。胸の前で手を組んで顔をメイドに向ける。
彼女はどんな顔をしているのだろうか？いつもどおり無表情に私を見ているのかもしれない。とにかく彼女はきっと一礼しただろう。

「それでは、お食事の時間になりましたらお迎えに上がります」

スカートをたくし上げてそんな事を言うだろう。きっとそんな感じだ。彼女の気配が遠ざかっていく。扉の向こうに。そして錠の閉まる音がした。
これでもう何もない。私の一日の残りはこうして終わる。頭にわざわざつけられたカチューシャが鬱陶しくて手に取る。

本当にもう嫌だった。毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日。死にたくなるくらい退屈な日々。死にたくなるくらい窮屈な日々。
どうしようもないくらい、毎日毎日繰り返されている。一体何がしたいの？何故こんな事をするの？そんな疑問も胸を過ぎることが確かにあった。
しかしそれ以上に憎いのは、顔を見たことも無い、いるのかいないのかもとんと分からない父親の存在だった。
あのメイドは父親の使いなのだという。そして彼女はその男の命で動いている。だからこれもあの男のせい。こんなに苦しいのもあの男のせい。
苛立ちばかりが積もっていく。暖炉の薪が砕けて折れる音がした。
私の中でも何かが砕けて折れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・ああああああああああああああっ！！！！」

辛うじて自由な片手でカチューシャを壁に投げつけた。それから何度も何度もつながれた腕を引っ張る。
何度も何度も。何度も引っ張る。手首が痛くて内出血を起こして首がきつく絞められて呼吸が出来なくても暴れた。

「あああああっ！！！ぐぅぅぅうううううう・・・・！！！！この・・・・！！忌々しい・・・・っ！！！」

手錠が繋がっている手首を引っかいた。何故はずれないのだろう。
いっそのことこの手首ごと引きちぎれてしまえばいいのに。
何度も何度もひっぱった。腕が痺れて痛くて泣きそうなのに、歯を食いしばって自分の腕を引きちぎろうとしている私。
一体何をしているんだろうって思って。それから涙が溢れて。何もかもを覆い隠している布に染み込んで消えた。

「・・・うう・・・・っく・・・・ふ・・・・・っ・・・・」

泣いた。声を殺して泣いた。手首が痛い。どうしたらいいの。

「うわあぁぁぁぁああ・・・・っ・・・・ああああああっ・・・・・！」

殺したい。私をこんな目に合わせている人間を殺したい。滅茶苦茶にしてやりたい。私の人生を滅茶苦茶にしたように。

ベッドの上を転がりまわることすら出来ない。ただただ仰向けに寝転がって泣いた。何もない、何も出来ない惨めな自分に。

しばらくしてメイドが部屋にやってきた。彼女は分かりきっていたかのように私の手首を手当てする。最初からこの人は分かっているのだ。

何も言わず手首に包帯を巻いてくれた。それから手錠を外して反対側の手首にそれをはめる。私は俯いた。

「それではお食事に向かいましょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

手を引かれ歩く。室内なのに履いたハイヒールは階段を降りる上で酷く不便だ。

やがてどこかにある食堂に連れて行かれる。そこでは私は本当に何も出来ない。椅子に座って、多分とても広いのであろう・・・声が反響するその場所でエサを待つ雛鳥のように口を開くだけだ。

隣に座ったメイドが私の口に食事を運ぶ。私はただそれを食べるだけだ。口元が汚れ、それを彼女がナプキンで拭く。

味なんかわかるわけがない。ただ酷く惨めなだけだ。こんなの自分で食べられるのに。学校だったら自分で食べられるのに。どうして？

「お味はいかがですか？お嬢様」

「・・・・・・・・不味いわ。酷く不味い」

「左様ですか」

味を聞いておいて文句を言っても受け流す。だったら最初から聞かないで欲しいのに。

彼女の事が憎くてたまらない。どうしてこんな家でこんな風に暮らしているのだろう？四六時中私の傍にいて、私の世話をする。

まるで飼われているみたいだ。お嬢様とメイドという関係とは裏腹に、彼女は飼い主で私はさながらペットだ。

籠の中で口をあけてエサを待っている雛がお似合いだ。

風呂に入るのは彼女のいつも一緒だ。彼女に脱がしてもらい、風呂に入る。

そこですら手錠と首輪は外れない。本当にいやになる。彼女に髪を洗ってもらい、一緒に湯船に浸かり、身体を拭いてもらう。

悔しくて涙が出そうになる。自分自身の全てを否定され蔑ろにされるような感覚。これが一日も欠かさず丸十八年。気が狂ってもおかしくない。

だから私は殺す。いつか絶対に殺してやるんだともう誓っている。

それはユメでありリソウであり絶対的に成し遂げなければならないイキガイだ。

寝巻き・・・といってもやたら派手な・・・に着替えさせられ自室に戻る。メイドはさっさと部屋を出て行ってしまった。

かけられた毛布の中、ひたすらに涙を流した。毎日毎日こんなだか

ら、涙はすぐに引いてしまってあとはあっけらかんとする。
何も見えない暗闇の中、あとはゆっくりと殺人のことを考える。あのメイドを殺す方法を。いや、あの父親を殺す方法を。
娘を監禁しペットのように放し飼いにする、狂った父親のことを。

「そうだ・・・・私は絶対に・・・・殺してやるんだ」

楽しい事を考えよう。

あの男の首が吹っ飛んで内蔵が飛び出して四肢を切断されてのた打ち回って死んでいくのを考えよう。

そうすればきっと、今日も眠れるから。

私の一日はいつもそうして終わる。

だからその日も、そうして終わった。

ユメノツヅキ／キヅツノメユ

その日は雨が降っていた。
駅前に呼び出されたオレはそこで彼女を待った。特に傘も差さないで待った。多分何を言われるのかは決まっていたし。

「あんたなんて最低よ！」

と、叫びながら駆け寄ってくると思い切り振り上げた手をオレの頬に向かって振り下ろした。
自分で言うのもあれだけど、かなりいい音がしたと思う。頬が冷たい空気と相まってピリピリと痛む。けれど表情は崩さない。
笑顔すら浮かべ彼女に手を伸ばす。その手を振り解き、女性は走り去っていった。多分オレの顔を殴りたくて呼びつけたんだろう。
心底うんざりだった。何とも面倒なことになった。溜息をついてUターンする。オレの住んでいるマンションは駅のすぐ近くにある。
帰宅するのに十分とかからない。
暗証番号を入力しなければ開かないセキュリティの玄関を潜り抜けエレベーターに乗り込む。
ぽたぽたとカーペットに染み込んでいく水滴。全身びっしょりで髪からは定期的に水滴が零れ落ちている。
何ともいえない心境のまま自分の部屋に向かう。カードキーのロックを解除して中に入った。
一人暮らしするには広すぎる異常な規模の玄関に乱雑に靴を脱ぎ捨てる。自分で言うのもあれだけど洒落た内装のダイニングに入り、ソファに腰掛けた。

「はー・・・・ずぶ濡れだよ」

「ふうん？で、何だって？」

部屋はテーブル脇にあるスタンドライトのみで照らされていた。薄暗い部屋の中、灯りに照らされながら本を読んでいる女が一人。家主であるオレが帰ってきたというのに挨拶一つしないどころかオレが冷蔵庫に入れておいたビールを勝手に飲んでいる有様だ。盛大に溜息をついて女に歩み寄り読んでいるハードカバーを引っ手繰った。目を細め、不満を訴えかけてくる。

「一応、お前のせいでふられたんだけど、オレ」

そう、それもこれも全てはこいつがオレの部屋で寝ているのを見られたのが全ての発端だ。
だというのに当の本人はなんら気にもせず平然と笑っている。

「本気で付き合ってなかったくせによく言うよ。それよりねえ、それ返して。今いいところなの」

「返さないし、本気で付き合ってなかったわけじゃないし。あとおかえりなさいとか、それくらいは言え」

女は立ち上がってオレの手から本を強引に奪い返し、冷ややかな瞳で笑いかけてくる。顔と顔とが異常接近し、彼女の瞳しか見えなくなる。
吐息が頬にかかる距離。爪先立ちでオレの身長にあわせ彼女はわざわざ息を吹きかけていた。恐らくわざとだと思われる。

「自分に嘘をつくのが好きだねクレイ。僕にそんなこと言っても無駄だって判ってるくせに。そんなこと、言われたくないって思ってるくせに」

テーブルの上に転がっていた眼鏡をケースに閉まって背を向ける。全体的に短いくせにそこだけ妙にながいもみあげがくるりと風に揺れる。
ソファにかかっていた紺のレザージャケットを羽織ってグローブを装着。床に転がっていたヘルメットを拾い上げて玄関へ向かっていく。

「どこ行くんだ？」

「コンビニ。傷心なんでしょ？クレイの元気が出るようにお酒買ってきてあげる」

「自分が飲みたいだけだろ」

「そんな事無いよ。こう見えてもね、結構尽くすタイプなんだ、僕」

ヒラヒラと手を振って去っていく。あれがあいつの性格なので今更とやかく言うことでもないし、言うほど不愉快でもない。
ソファに身を沈めた。このままだと風邪を引きそうだったのでしばらくそうしてぼんやりした後、シャワーを浴びに浴室に向かった。
服を直接洗濯機に突っ込んで蛇口をひねる。ユニットバスとは言えちょっとした広さのそこで浴びるシャワーは当然悪くはない。
髪を結んでいた女物のリボンを解いてシャワーを浴びる。長い長い髪が視界を遮り、少々不愉快だ。
そろそろ切ったほうがいいと思い続けて早半年。いつになったら髪を切る日が来るのだろうか。些か疑問になってきた。

「ま、別に困ってないからいいけど」

ユメノツヅキ／キヅツノメユ

Ｓｉｄｅ：ＲＥＤ

オレ、赤井クレイがこのマンションに住み始めたのは今から一年ほど前のことだ。
それまではここよりも何段階も降下したランクの場所に住んでいたのだが、見知らぬ女性にマンションを買ってもらったのでそこに転居したというわけである。
判りやすく言うとオレはホストで、序に言うと結構な人気者で。勿論女性にもモテモテで至れり尽くせりで。
お金を貰う方法もモノを貰う方法も客から金を搾り取る方法もそれなりに手に馴染んできて、プレゼントも増えてきて。
まあそんなわけで金にも生活にも困っていない。女性関係のいざこざは絶えた事がないけれど、毎日続いているとそれも慣れてしまう。
今は仕事は休み。丸半月ほど休みを貰った。今までろくに休みがなかったし、まあなんとなく仕事もしたくなくなってきたのが理由としてあげられる。
現在は高級マンションで二人暮し。いや、１．５人暮らし。同居している女はこの部屋にいたりいなかったりする風来坊だからだ。
シャワーを浴びて髪をバスタオルでがしがし拭いてとりあえずパンツとズボンだけ穿いて脱衣所を出る。着替えを用意していなかった。廊下に出たところでばったり帰宅してきたあいつと遭遇した。上半身裸のオレを見ても全く動揺する気配は無い。

「シャワー浴びてたんだ」

「ああ・・・・それで、何買って来たわけ」

「うん、カップラーメン」

酒っていってなかったっけか。しかもオレのためとかなんとかいってなかったっけか。
意気揚々とダイニングに去っていく後姿を呼び止める事もしかりつける事もしなかった。そんなことはハッキリ言って無駄だから。

彼女の名前はユカリ。紫と書いてゆかりと読むと彼女は自慢げに語っていたが何がすごいのかはよくわからない。
いつも寝ぼけているのか全てを見透かしているのかよくわからない目をしている。そしてやる事なすこと取りとめが無い。
幻影のような存在。そして我が家の居候。もう彼女と暮らし始めて二年になる。絶対的な正体不明。
年齢不詳。苗字不詳。職業不詳。経歴不詳。ただ一つハッキリしているのは、ユカリという名前と、一人称が僕だということだけだ。
オレにとって彼女はそんな情報が全てであり、それ以上のことは必要ない。とにかく彼女はかわいい女の子で、ユカリというだけのこと。
問題はその変わった性格であり、彼女でも妻でもないくせに平然と男の部屋に寝泊りしていることなのだが。
テーブルの上にカップラーメンを並べてお湯を注いでいる姿を何となく眺めていると視線に気づいた彼女が顔を上げた。

「なあに？もしかして惚れた？」

「それはない」

「ひどいな。全否定はないんじゃない？これでも結構カワイイっていう自覚はあるんだけどな」

「カワイイ女の子なんて世の中案外有り触れてるよ。お前みたいな変なのと比べれば大分マシそうなのがゴロゴロね」

「僕とんこつね。クレイは塩でいいんでしょ」

「聞けよ・・・」

彼女の中でその話題はもう終わっていた。オレは溜息をついてそれに従う。

カップラーメンが出来上がるのを待ちながら彼女は本を読んでいた。コンタクトレンズを外したのか、今はスタイリッシュなデザインの眼鏡をかけている。

暖房の温度をより高くしてオレはテレビのリモコンを手にした。深夜の番組はどれも面白いのかつまらないのかよくわからないが、無音よりはいくらか気休めになる。

全く面白くないお笑い芸人たちが漫才を披露している番組を眺めていると、ユカリは割り箸を割りながら言った。

「ねえ、賭けない？」

ユカリの口癖だった。

ユカリはとんでもないギャンブラーで、事あるごとにオレに賭けを持ち込んでくる。

「いいぞ。ルールと賭け品は？」

「今日はそうだなあ・・・・じゃあ、キス。キス賭けよう」

「・・・・・・・・・・内容は？」

呆れながら箸を割った。ノリノリで話を進めるユカリ。こういう話をしている時だけは本当に無邪気に楽しそうに笑う。

「早食いでどう？勝ったほうが相手にキス出来る。勿論、拒否したいならしてもいい。無論勝ったなら、だけど」

「開始の合図は？」

「あのコントが終わったら」

無言でカップのふたを外して両手を合わせた。最初からそのつもりだったのか、オレたちの前に並んだ二つのラーメンは同じサイズ。味は違えと同じラーメンだった。

二人して無言で箸を片手にＴＶを眺める奇妙な図が続く。コントが終了し、採点結果が表示されると同時にオレたちはラーメンを口に運んだ。

黙ってひたすらにラーメンを食う。何とも奇妙な映像だった。しかしそんなこと気にしている場合ではない。

気合を入れて食う。結果は見えていた。何せユカリは小食であり、結局早く食べるどころか食べきらずギブアップしたからだ。

その結果は見えていた。確かにユカリはギャンブラーだったが、自分が勝てる賭けはしないというとんでもなく愚かな主義を掲げていたから。

今まで幾度となくこいつと勝負してきたが、オレが負けた回数なんて数えるほどしかない。容赦なくスープまで飲み干して空になった容器をゴミ箱に投げ込んだ。

「・・・・・・何してんだ？」

「キス待ち」

目を閉じてにこにこしている。呆れた。一体何がしたかったのやら。完全に無視して立ち上がった。もうなんだか起きているのも面倒になったので寝ることにした。時間はとっくに日付を変えている。寝室に向かって歩き始めるとその後ろをぴったりとユカリがついてきた。振り返るとユカリはそれが当然であるようにオレの手を取って笑う。

「今日は一緒に寝ない？」

「・・・・・・・・・・・」

額を抑えた。こいつの相手をするのは疲れる。一々真面目にやっていたら身が持たない。

だからオレは言った。『勝手にしろ』と。

「じゃあ、勝手にするね」

寝室にはシングルベッドが一つだけ。普段はユカリはダイニングのソファで寝ているのでベッドは必要ない。

そう、普段から一緒に寝ているわけではない。着替えるのも面倒だったので外出用の格好のままベッドに入った。とりあえず上着だけ脱いで床に放置する。

ユカリは枕を半分奪って仰向けに寝転んだ。オレはもう全然気にせず寝る。いちいち気にしていたら身が持たないから。

「ねえ、手、握っててもいい？」

溜息をつくのも面倒だった。反応するのも馬鹿馬鹿しい。だからオレは無言でその手を取った。
ユカリはきっと笑っているだろう。薄っすらと微笑を浮かべて、静かに天井を見つめているだろう。
その瞼がゆっくりと閉じて、静かに呼吸を抑えて眠るだろう。そんな姿が目に浮かぶようだった。
本当に眠かったのは事実であり、だからオレは目を閉じて冷たい手を握っていた。
殴られた頬の痛みも、最低だといわれた事も、何もかもその頃には忘れてしまっていた。

ユメを見る。

子供の頃から何度も何度も繰り返し見る。

そのユメの主人公は小さな少女だった。本当に小さな、小さな少女だ。十歳くらいだろうか。
ユメの中の少女はいつもドレスを着用していた。いついかなるときもドレス。そしてそのユメの中の少女はいつも部屋に閉じ込められていた。
薄暗い洋館の一室。そこで少女は手足を鎖で拘束されていた。それが当たり前の日々だった。少女は涙も長さなった。
毎日毎日少女は目隠しをされ、両手足を拘束されていた。週末になると呼び出され、メイドに連れられて食卓に向かう。
広い広い食卓には仮面を被った正装の男女がずらりと並んでいて、彼らは拍手で少女を迎え入れる。
食卓に並んだ数え切れない高級な料理によだれが溢れそうになるほ

ど少女は空腹だった。それも我慢して頭を下げる。
少女の身体はいつも包帯だらけだった。いつも怪我をしていた。マイクの前に立って歌う。
食事が始まった。食事が始まっても少女は歌い続ける。芸を繰り返し客を楽しませる。仮面の人々はソレを見て楽しそうに笑う。
少女はただ歌う。ずっとずっと歌う。休むことは許されない。汗を零し、ひたすらに踊る。
やがてメイドに再び両手足を拘束される。両手を後ろで縛られ、即席で用意された寝台の上に寝かされる。
寝かされると、客はそれぞれ代金を支払う。テーブルの上に並んでいく札束の山。少女は目隠しをされる。
足音が近づいてくる。それから良くわからないけど刃物の気配。そうして少女は・・・・。

「・・・・・・・・・・」

そこでいつも目を覚ます。それから先のことも、それまでの事も何もわからないまま。
うなされていたかもしれない。額の汗を拭って再びベッドにもぐった。とてもじゃないが目覚めたい気分ではなかった。
何度も深呼吸をする。見慣れているはずのユメなのにどうしても忘れることが出来ない。いちいち気にして憂鬱な気分になるのもそろそろ言い加減にしなければならないだろうと思う。
目を覚ませば隣で寝ていたはずのユカリの姿はなかった。いつもどおりだ。あいつはきっとオレより早く目覚めてとっととどこかへ行ってしまう。
毎日毎日どこで何をしているのやらさっぱりだが、とにかくあいつはどこかへいった。けれど枕に微かに残る自分のものではないシャンプーの香りが彼女の存在が幻ではなく現実なのだと物語っていた。
朝食を早々に済ませて部屋を出ようとした時だった。備え付けの電

話がやかましく鳴り始める。仕方なく靴を脱いでダイニングに戻る。

「はい、赤井ですけど」

電話に出たというのに反応は返ってこなかった。何分も待ってみたが返事が来る様子は無い。

オレは黙って電話を切った。これでも人に恨まれている回数だけは自信がある。誰かのいやがらせだとしてもなんら問題はない。

どうせ仕事で使うのは携帯電話なのだから、備え付けの電話回線は引っこ抜いた。これで気持ちよく外出できるだろう。

外出したところで何をするというわけでもない。歩きながら髪をリボンで縛っていく。

容姿も妙に中性的なオレは髪を縛っているとよく女に間違えられる。それだけ自分の顔がいいというわけなのだが、女に間違えられるというのはあまりいい気はしない。しないというのに何故かわざわざ髪を女物のリボンで結ぶのだから自分でもよくわからない。

オレが住んでいる町ははっきり言って田舎だ。都会にくらべればずっと田舎。ただ何もなわけではなくて、多少はにぎわっているところもあるというだけ。

そのにぎわっている部分に住んでいるというだけで、少し歩けばだんだんと町並みは閑散としてくる。しかしそれなりにこの街がオレは好きだった。

一体じゃあ何が好きなんだと言われると答えに詰まるのだが、まあとにかくこの町は好きだった。そのことは理解してもらいたい。

だから仮に、オフィス街を歩いていたら唐突に頭上から人が落下してきたとしても。

オレは驚く事も無く、この街から去ることもない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

悲鳴が上がった。女性のものだった。オレの進行方向、歩道のど真ん中、他にもたくさんの通行人が居る場所に、人が、人間が落ちてきた。

それは目の前でつぶれたトマトみたいにはじけ飛んで何か中身をぶちまけていた。それは少女だった。高校の制服を着ている、女子高生だった。

何が起きたのかいまいち理解出来ない。頬についている飛んできた血を親指でなぞって指先で擦り合わせてみる。

「・・・・・何だ？」

頭上を見上げた。そこには誰も居ない。無論、居る方がおかしいのだが。

見上げた空には大きなビルが建っていた。当然オフィス。しかし現在は何の意味も持たずテナント募集中の。

誰もいないビルから少女は飛び降り、オレの目の前でトマトになった。人間だったはずの何かは、今は人間ではない何かになった。

その落下してくる少女はオレを見ていたような気がした。だって、落ちてくる瞬間、目の前ではじける直前、目があった気がしたから。

周囲は騒然となった。すぐに大騒ぎになる。オレはその醜い死体を、四肢がおかしな方向へ向いてしまっている頭がはじけた死体を見下ろした。

哀れだと思った。それは死んでしまったからではない。こんな風に醜い状態になってしまったことがあわれだった。

彼女もまた少女であり人間であったのならば生きている間はそこそこお洒落に気を使ったりする普通の学生だったんだろうと何となく思う。これが自殺だったとしても、その死の直前まで彼女は普通の人間だったはずだ。

それが死んで、きれいだったものから汚い何かに成り下がった瞬間を見て、オレはそれを哀れだと思ったのだ。
隣を通り過ぎる。別にオレは関係ないのだから構わないだろう。誰かに呼び止められた気もしたが振り返らなかった。
指先についた血。ポケットの中で何度か擦り合わせて、それから何か妙だと思った。その理由にはすぐに気づいて、少しだけ振り返った。

「血・・・冷たかったな」

驚くわけでもなく。恐れるわけでもなく。ただ単調にそう思った。
その時思考を過ぎったその疑問がオレの全てを捻じ曲げていくとは、全く予想もしないままに。

それが全ての始まりだとは、全く予想もしないままに。

キミョウナカノジョ／ョジノカナウョミキ

「わたくしの事はギンと、そうお呼び下さい」

路上だった。真昼の路上。付け加えるならば、大通りで、しかも休日の。

スカートの裾を両手でそっとたくし上げながら会釈したそのメイドは確かに私の家で暮らしている憎たらしいあいつだった。

だから私は声も出なかった。恥ずかしさと怒りの余り。だっていうのにメイド・・・『ギン』は平然とカノジョを見つめていた。

「えー・・・・・・っとぉ・・・・・・？」

「あ、あのね・・・違うの、これは・・・・」

自分でも何が違うというのかさっぱりわからない。ただとにかくこんなメイドとはかかわりが無いという事を一刻も早くアピールしこの妙な状況から離脱を計りたかった。だというのにメイドは私に半歩後ろに立ち、

「それでは、本日は同行させて頂きます。お嬢様」

「お、お嬢様！？」

終わった、と思った。本気でメイドが憎らしくなった。

私に友達が出来るのがそんなに嫌なの？私が一人ぼっちじゃなくなるのがそんなに嫌なの？

せっかく頑張ったのに。頑張ってここまで来たのに。こんなところ

でぶち壊しにされるなんて死んでも死に切れない。
悔しくて思わず涙すら溢れそうになった時だった。彼女は私に手を差し伸べて、それから温かい笑顔を向けてくれた。

「それじゃ、いこっか？香木原さん」

一瞬で理解できる事というものがある。彼女は私の事を本当になんとも思っていないのだ。
休日だというのに、ドレスを着てくるのが嫌で制服でやってきた私を。ついでにメイドまで着いてきてしまった私を。
変だと、気持ち悪いと、思っていない・・・いや、最初から彼女の中に人を『そういう風に見る選択肢』が存在していない。
なんていう奇跡。本当に純粋で優しい人間。心の底から感動するくらいの。だから私は強く頷ける。

「ええ」

彼女、愛染レンは私の手を引いて人懐っこい笑顔を浮かべた。

キミョウナカノジョ／ヨジノカナウヨミキ

Ｓｉｄｅ：ＢＬＵＥ

始まりはある日の放課後だった。
最近自分の生活に猛烈な嫌気を感じていた私、香木原アヲイ。生活の中で一番楽しい時間であるはずの学校に行っても正直上の空だっ

た。もう本当につかれきっていて、明日にでも死んでしまいたい気分だった。
死んでしまいたいという気持ちと殺してやりたいという気持ちが私の中の天秤でグラグラ揺れて辛うじて殺したいが勝っているので死ぬわけにはいかない。多分そんな感じの心境だったのだろう。
今日こそ殺す。まずあのメイドから殺す。そう考えてかつて購入したナイフがある。それは鞄の中に入ったまま。もう四年以上携帯している。
一般の女子高生が肌身離さず持っているのが携帯電話だとすれば私はこのナイフだ。刃物ほど持っていてワクワクするものもない。
だというのに、今日は何の妄想も浮かんでこない。本当に沈んでいた。まさにKO負けだ。一発でリングに鎮められてしまった。
手首に巻かれた包帯を眺める。腕を引きちぎってでも、と考えたあの時。何故そんなことまで思ってしまったのか。腕がなかったら逃げたって不便な生活が続くだけじゃないか。私は五体満足で逃げ切らなくちゃ意味が無い・・・ってあれ？デジャヴ？以前にもこんな事を考えていたような・・・。

「はあ」

溜息をつくなんてらしくない。家ならともかく学校でなんて相当なことだ。やっぱり疲れているんだろう・・・髪をかきあげて目を閉じた。

ぷにっ。

「ひゃあ！？」

慌てて飛びのいたのは頬を何者かにつつかれたからだ。その程度だと頭では認識しているのにものすごく派手なリアクションを取って

しまった。
椅子から落ちて壁に頭をぶつけて目尻に涙を浮かべていると、つついた張本人がえらくおろおろしながら駆け寄ってきた。
「ご、ごめんっ！そんなに驚くとは思わなくて・・・・こっちがむしろビックリしちゃった・・・」
「・・・・・・・・愛染・・・さん・・・？」
「あ、覚えててくれたんだ？名前」
彼女はにっこり笑いながら手を差し伸べてくれた。その手に掴まり立ち上がる。それから彼女は制服についた埃を叩き落として髪を整えてくれた。
そういう風にされるのは正直慣れているので私は相手がそうしやすいように大人しくしていた。
レンはクラスの中でも一番といっていいくらい背が低い。一方私は一番とはいえないが高い方だ。レンは私の髪に触るため椅子の上に上った。
「頭ぶつけてたけど痛くない？」
椅子の上に立ったレンがさらに背伸びまでして私がぶつけた後頭部辺りを覗き込んでいる。だったら背後に回ればいいと思ったが、まあせっかくの親切を無駄にするのもどうかと思い大人しくなすがままにされることにした・・・のだが、
「うぉーい、レン・・・・パンツ見えてんぞ」
教室の入り口に立っていた一人の男子生徒が声を上げた。私とレン

が教室を見渡すと、クラスメイトはみんなこっちを見て笑っているか、レンのパンツを覗いていた。
レンがどんな表情をしているのかはさっぱりわからなかったが、とにかくレンは私の頭の上に手を乗せたまま固まっていた。おしりを教室の方に突き出しながら。
無論そういう姿勢になるのはなるのだが、レンはただでさえ短いスカートを今風にさらに短く穿いているのが悪いのだと思う。ちょっとした事で見えてもおかしくない・・・と、そんな説明をしている場合ではなかった。

「愛染さん、もう大丈夫ですよ」

彼女の身体を持ち上げて床に降ろす。レンは想像していた以上に軽くてあっさりと持ち上がってしまった。
レンは顔を赤くしたまま部屋の隅っこまで行くと頭を抱えて体育座りをはじめてしまった。そういえば何度かここでこうしていたのを見たような気もする。

「香木原ぁ！レンを泣かしちゃダメだろ～！」

「えっ？えっ？私は何も・・・・」

教室の入り口で笑っていた少年は私の傍まで歩み寄ると爽やかに笑って見せた。

「ただの冗談だからそんなうろたえんなよ。悪い事してるみてーだろ」

そう言って私の肩を叩き、それから隅っこで丸くなっているレンを抱え上げた。

「おーい、本日の授業は終了致しました。部活動の無い生徒は早々にお帰りください～」

「もうお嫁にいーーーーけーーーーなーーーーいいいーーーーーっ！！！」

「お前のパンツなんぞクラスの連中はもう見慣れてるから安心しろ」

「いやあああああーーーーーーーっ！！！」

そのわけのわからない状況に私はもう口をあけてぽかーんと。もう本当、あほみたいにぽかーんとする事しか出来なかった。

しばらくするとレンも落ち込みながら戻ってきた。多分彼女は結構繊細な性格・・・・なんだと思う・・・落ち込みやすいっていうか・・・うん・・・。

「ご、ごめんね香木原さん・・・・でも頭、大丈夫？」

「それは大丈夫です。心配どころか、迷惑をかけてしまったようで・・・・」

「ああ、うん、それはいいの！あたしもね、自分でよくパンツ見せてるって自覚あるからっ！！」

多分それは彼女なりのフォローなのだろうと思った。けれどその言い方だとなんだかいやらしく聴こえるのは私だけだろうか。

しかも大声で叫んだものだからクラス中に聴こえている。誰もが笑いながらレンのセリフに聞き耳を立てていると、彼女は怒って机をバンバン叩いた。

「もうきみたちみんな帰りなさいっ！！部活動！勉強！就職活動！そして恋愛！！高校時代のラストを飾る時期なんだよ！もっと身になることやりなよお！」

教室に残っていた人々が笑いながら出て行く。しかし三年のこの時期だと部活動は引退していて恋愛どころではないと思うのだけれど。無論そんなことは口にしなかった。レンは『全くもう・・・』とかぶちぶち言っていた。比較的大人しい印象だった彼女だが、全くそうではなかったらしい。

いや、何故こんなに騒がしい人間を見落としていたのだろう？クラス中の誰もを知り尽くしていると思っていた私にとってそれは意外の塊だった。

レンは振り返り、再び私にゴメンと謝った後隣に立っている長身の少年を見上げて言った。

「アイダ君、こんなところで何してんの？クラス違うでしょ？」

そうだ。何か違和感があると思ったらこんな少年このクラスにはいないのだ。見覚えが全くない・・・割には彼は私の名前を知っていた。

私の方が知っていても向こうが知らないという状況は慣れているけれど、これは逆パターン。何故か身構えている自分がいた。

髪をツンツンした形状に固め、だらしが無い制服の着方をしているところを見るとなんだか不良・・・というか不良にしか見えなかったわけだが、少年はそんな雰囲気を全く思わせない明るい調子で答えた。

「いや、暇だったから立ち寄ったんだ。ついでにイオリを拾って行こうかと思ったんだが・・・・いないみたいだな」

「今日は早く帰るって一番最初に出て行ったよ？」

「んー・・・そうか・・・じゃあ俺は図書室寄ってから帰るから。そんじゃな」

二人は手を振り合って分かれた。少年は意気揚々と飛び出していったわけだが、目的地が図書室とはこれいかに。

それをレンに聞いてみると、彼はなんでも小説家希望なのだそうで。あんな外見なのに、人は見た目には寄らない。やっぱり面白いものだ。

何はともあれなぜか駅までの道程を一緒に歩く事になってしまった私たちは肩を並べて夕日の下、影を伸ばす。

しかし何故こんな状況になってしまったのだろう？普段なら断りそうなものだが、状況に流されまくってここまできてしまった。

ちらりとレンの様子を眺めると彼女は・・・何を考えているのかわからない。ただ何か遠い昔を思い返すような、大人びた表情を浮かべていた。

その表情がまた彼女の小柄な体系とのギャップも相まって妙にかっこよく見えるのだ。思わず心臓がどきどきしそうになって慌てて冷静を装う。

というか何故小さい女の子相手にどきどきしなければならないんだ私。少しおかしいんじゃないか・・・。

額に手を当てながらぞっとしているとレンは立ち止まり、

「香木原さんって、カワイイよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんていうんだろうか。ズキューン、みたいな。そういうのでわか

ってもらえるとありがたい。
彼女の言葉が、笑顔が、胸に突き刺さって通り抜けていった。恥ずかしくて死にそうだった。今彼女がなんて言ったのかわからなくなってくる。

「元々カワイイのになんでいつも一人なのかな～って実はずーっと思ってたんだ」

「え、えーと・・・」

こういうときどんな顔をしてどんな返事をすればいいのだろう？わからない。結局空想の中でしか他人と関わったことの無い私には。それにしても本当に参った。何故彼女はこんなにもかわいいのだろう。いや、愛くるしい部分を上げ始めたらきりがないわけだが、とにかくなんというかまあ・・・静まれ私の心臓。

「そうだ！ねえ、明日ひま？よかったら一緒にどっか出かけようよ」

「え？え？」

「だから、友達になろーって言ってるの」

「ええっ！？あっ、いっ・・・いい・・・です・・・・・・・けど・・・・・・」

「けど？」

わざわざ下から顔を覗き込んでくる。きらきらした目が直視できなくて顔を手で覆う。

「私みたいなのと一緒に居ても、楽しくないと思いますけど・・・・・」

「そんなことないよ～？あたし結構楽しいけどな、今も。香木原さんは楽しくないの？」

じーっと見つめてくる。どんどん近づいて。逃げ出したくなる。思わず苦笑してしまう。頬が熱くて死にそうだ。

「・・・・・・・・楽しいです」

猛烈に恥ずかしくて頷いた。レンは楽しそうに笑い、足を止める。気づけばもう駅前。彼女はどうやらこの町に住んでいるようだが、私は学校からは離れた場所に住んでいる・・・つまり電車通学のためここで彼女とはお別れだ。

なんだか残念なような助かったような、複雑な心境のまま駅を見上げる。それは安堵からか不服からか、ともかく溜息をついて振り返った。

「それでは私はここで」

「あ、うん。じゃあ、明日の一時くらいにここでいい？それとも愛染さんのおうちまで迎えにいこっか？」

「それは結構ですっ！！！！」

レンが目を丸くしていた。しかし声を荒らげずにはいられなかった。何せ家はアレだし。

咳払いをする。大声を出してしまったことが恥ずかしかった。家ならともかくここでは人目に着きすぎる。

「し、失礼・・・・それでは明日、必ず」

「う、うん・・・・？まあいいや、またね、香木原さ～ん！」

「また・・・・ね」

小さく手を振った。レンの背中が遠ざかっていくのが寂しい。寂しい？そんな風に感じるほどまだ親しくはないはずなのに。
ああ、なんていうかあんなの反則だ。かわいすぎる。くそう、うらやましい。あんなふうに生きられたらどれだけ素敵だろう。
駅内にある鏡状の壁のレリーフに映りこんだ自分の顔。無表情でとても楽しそうには見えない。一緒にいるだけで不幸になってしまいそうだと錯覚するほど。顔つきはきれいでも、そこには生気が・・・・人間らしさみたいなものが欠けていた。
そうして欠如してしまっているものをレンは持っているから惹かれるのだろうか。いやいや落ち着け私。少し冷静になるんだ。

「女の子相手にドキドキしすぎです・・・・どう考えても・・・・」

それから家に帰ってメイドの束縛されて部屋に押し込められるまではまったく先日と同じだった。
ただ一つ違うことと言えば私は翌日の休日、何をしようかと考えていることだ。しかしそこにきてようやく私は多数の問題に気づいた。
まず、第一に外に出た事が私は一度もないということだ。用事が無ければ外には出られないし、あってもメイドが勝手に済ませてしまうことが多々ある。
第二に私の私服は豪勢なドレスしかないということだ。流石にあん

なのを着て歩いている人間を私は知らないし、そんな格好で言ったらいくらなんでもレンだって引くだろうと思う。
第三に・・・・・・・まあこれは・・・私の心境の問題だから省くとして。

「ああもう、どうすればいいの」

ベッドの上で独り言。相変わらず手足は拘束されている上、視界も閉ざされている。お陰でレンの顔ばかり思い出してしまってもうやばい状況。
じたばたしながら悩んでいると、ありえない方向から声が聴こえた。すぐ枕元。そこには多分誰かが立っているのだけど、それが誰だかわからない。
思わず息を呑んだ。幽霊かとも思ったが違う。確かに生きている気配だ。さっきまでじたばたしていたのを見られていたのかと思うと恥ずかしくて死にそうだ。

「誰？そこにいるのは」

気配はすぐに消えた。まるで最初からなかったかのように。変わりに部屋に入ってきたのはあの小憎たらしいメイドだった。
鍵を開ける音に続き普段とは違い多少慌てた様子で入ってくる。私が暴れていたのを察したのだろうか？とはいえそれほど派手ではなかったが。

「お嬢様・・・・今日は随分と」

「随分と何？大人しいって？毎日毎日派手に騒いでたらいくらなんでも身体が持たないもの」

「賢明なご判断です」

嫌味で言ったのにまたこの反応。いい加減に嫌気が差す。
しかし明日は何とかこのメイドに外に出してもらわなければならない。私は彼女の手を取り、引き寄せた。
無論目は見えていないがそんなことになってメイドは恐らく驚いているだろう。すぐ目の前に彼女の顔がある。その肩に手を乗せて私は言う。

「ねえ、ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

「なんなりと」

「明日、と、と、友達と・・・・一緒に出かけたいんだけど・・・」

「左様ですか。それでは時間になったらお声をかけて下さい」

「え？」

余りにも淡々としていて理解出来なかったが、今彼女は時間になったら声をかけろ、と言ったのだろうか。

「あの・・・・今なんて？」

思わず聞き返してしまう。メイドは先ほどと変わらない沈んだトーンで囁いた。

「ですから、時間になったらお声をかけて下さい。鍵を外しに参ります」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うそっ！？本当に！？本当の本当に！？」

「わたくしは嘘だけはつきません」

「いいの！？外出ちゃってもいいの！？」

「構いませんが」

「うわあっ！？あなた大好きっ！好き好き！好きーーー！！」

思わず抱き寄せた。何度も頬擦りしてそれからほっぺにキスまでしてしまった。しかし鎖が引っかかり腕に痛みが走ると我に返った。メイドはどんな顔をしているだろうか。もしかしたら迷惑そうにしているかもしれない。彼女を放すと私もベッドの上に寝転んだ。

「とにかくそういうことでよろしくね」

「・・・・・・・・・・・・・・・畏まりました」

なにやら微妙な沈黙を挟んで返答はあった。メイドは部屋を出て行くと鍵を閉め、去っていった。

そうなってから自分が妙に恥ずかしいことをしてしまったと思い返し死にたくなった。

だってしかたないじゃないか。嬉しくてたまらない。外に出られる。それだけで最高なのに。明日は友達と一緒なんだ。

幸せすぎてこれはやばいんじゃないかと思う。明日には世界が終わってしまったとしても、私は納得できる。

ああ、これまでの人生の絶頂期だ。さようなら暗い部屋。始めまして外の世界の休日。

明日は朝早くに起きられるよう、私はさっさと床についた。けれど遠足前の子供のように目が冴えてしまい、結局寝付く事はなかなか出来なかった。

そうして翌日。
約束の時間に間に合うように鍵を外してもらうと私は走って坂道を往く。駅につく時間も、そこから何時に電車が出るのかもバッチリだ。
服装はメイドが何か用意しようとしていたけれど私はそれを全力で拒否し学校もないのに制服を着た。ドレスよりはいくらかマシだ。
全力疾走しているのに走るのが遅い私は、にぶくてすぐ転びそうになる私はそれでも走った。一刻も早くレンに会いたくて。
何故こんなに会いたいのかさっぱりわからない。でも間違いのない事が一つだけ。彼女は私の暗い部屋に一陣の風を運んできた天使なのだ。
だからかわいくて当然なのだ。どきどきして当然なのだ。だから仕方ない。仕方ないのだ。
電車が速く進めと思う。いくらでもいい、とにかく僅かでもいいから早く運んで欲しい。
駅を駆け出して懸命に走る。いつからだろう、懸命に走る事を忘れていた私。今はあの頃のワクワクした気持ちを思い出せる。
子供のように駆け寄って。レンの姿が見える。彼女の傍に手を振って・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・」

転んだ。レンのすぐ隣に我が家のメイドが立っていたからだ。ものすごく派手に転んだ。一昔前のコントみたいな転び方だった。

ずこーっ！みたいな。ああ、本気で恥ずかしい。自殺したい。でもがんばる。レンの前でかっこ悪いところを見せたくなくて立ち上がった。
とりあえずメイドに駆け寄りその両肩を掴んでぐいぐい駅の中へ押し込み、首を傾げているレンを他所ににらみつけた。

「あなた・・・・・・どうしてここに居るのかしら？」

「一応監視もわたくしの仕事ですので」

「監視！？正気！？」

「はい」

言われてみればすでに正気の沙汰ではないのだった。
思わず冷や汗と共に変な笑いが胸の奥からこみ上げてくる。引き攣った笑顔を浮かべる私を無表情に眺めている彼女。本気で殺したい。しばらくそうしてにらみ合いが続いた。私としては今すぐにでもコイツを殺してやりたいのだけれど、いかんせん人が多すぎるわけで。

「ねえ、香木原さんそのメイドさんと知り合いなの？」

「あ、ああ・・・・うん・・・・あの・・・えええとですね・・・・・
彼女は・・・」

「わたくしの事はギンと、そうお呼び下さい」

こうして最悪な一日が始まった。最高の一日になるはずだったのにまさかの逆転。どうすればいいのかわからない。支離滅裂だ、もう・

・・。

三人で肩を並べて歩いている。レンはハイネックの黒いセーターに赤いミニスカート、その上になんか『闘魂』とか書かれている良く分からないジャンパーを着ていた。

そのセンスはどうなのかと思いながらもレンには似合っているような似合っていないような・・・そして隣には漆黒のメイド服と反対側には制服の女子高生。何なのだろうこのメンツは。レンは気にしなくても周囲の人々は気にするに決まっている。私は小さく溜息をついた。

ギン。メイドの名前。それを私は始めて知った。確かに彼女の髪は銀色だった。少なくとも日本人ではない。一体どこの何者なのか、それもわからない。

常識的に考えて今の世の中にメイドというだけでも異質なのにあんな館で働いているとなると相当なものだ。相当狂ってる。でもそれは、私もか。

「さて集まったはいいけど何をするのか全く決めてこなかったんだよね。どうしよっか？」

「私は・・・」

「まずは服からどうにかしたほうがよろしいかと」

何故か会話にしゃしゃり出てくるギン。本当に憎らしいやつだ。しかもそれは私がたった今言おうと思っていたことなのに。

ああ、レン・・・名案だ！見たいな顔しないで！それ本当は私が言うはずのセリフだったんだから！！

「ギン～・・・・・！」

「お呼びでしょうかお嬢様」

「あのね・・・そうじゃなくて・・・・・ああもうっ！もういいですっ！！」

せっかく楽しいデート・・・じゃなくて外出になるはずだったのに何故こうなってしまうのだろう？

結局私たちはレンに連れられて商店街を歩き回った。駅前のそこは妙に広くて近代的で、私はそうした空気に触れた事もなかったから緊張して。

そうだ。年頃の女の子っぽい事など何一つしてこなかった。勉強すら私にとっては遠い世界の話だ。それもこれもギンがいたせい。

だからギンが憎たらしい。彼女がせめて私の事を拘束しなければと思う。けれど彼女は普通の顔をしていて、感情の色なんか何一つ露にしないで。

そもそもメイド服なのにあんなに堂々としていることも、堂々としているギンと一緒に居ても平然としているレンも、何もかもおかしい。奇妙な状況に他ならない。私がこの中で一番奇妙な生活を送っているはずなのに、何だかコレではまるで私が普通みたいだ。

そう考えるとなんだかいろいろな肩の力が抜けてしまった。自分が意外とこのメンツの中で普通だという事実のせいか、それとも諦めのせいか。

どちらにせよギンがいなかったら私は緊張してしまって会話どころではなかったかもしれない。そういう意味ではギンに感謝してもいいのかも、と思う。

「・・・・・・・・ギン、あなたもメイド服以外をたまには着たらどうなの？」

「左様ですか？」

「左様よ左様。何でもいいから好きなの買ってきなさい・・・どうせお金は腐るほどあるんだし」

「ですが、」

「ですが、ではなくて。いいからそうしなさい。あなたに遠慮なんて言葉、似合わないわ」

「・・・・・・・・・畏まりました」

メイドが店頭に並んだ服の羅列に紛れていく。レンはそれを眺めながら何故か小さく笑い続けていた。
なんだかばつが悪くて目を細めてレンを見つめると彼女は申し訳なさそうに言う。

「だってえ、何か本当にお嬢様なんだもん」

「・・・・・・・・ほっといてください・・・・こう見えても結構気にしているんですから、それ」

「そうなの？素敵だと思うけどな。どうせお金は腐るほどあるんだし」

恐らく私の真似なのだろう。出来る限りクールを気取って言うレンに思わず吹き出してしまう。私はそんな風に見えているのだろうか。ああ、そうかもしれない。だったらもうクールでいいのかもしれない。少なくとも慌てふためいていては友情は上手く行かないはずだ。

「ギンさぁん！ついでに香木原さんの服も探しましょう！」

「愛染さん・・・あのね・・・」

「いいからいいから」

レンは本当に凄いと思う。初対面であるギンともあんなにもう馴染んでしまっている。
何よりギンが私以外の人間と話しているという状況が何だか非現実的だった。そういえば彼女も普段は屋敷で何をしているのだろう？
私はギンの事を何も知らない。レンのことを何も知らないように。
そうだ、私は本当に何も知らないのだ。
ただだからってギンのことを許せるとかそういうことではない。それは別の話だ。ただ、ギンの意外な一面を垣間見る事が出来た気がする。
結局そこで着替えを済ませた私たちは何だかもう手持ちぶたさになってしまった。今日もいい天気で、思考がどんどん鈍っていく。
隣に立っているギンの格好がまた異常だった。ニット棒を被りポンチョをかけている。メイド服であるのが当然だったのでもう別人にしか見えない。
ソレは勿論、私にも言えることなのだが。誰だこれ。
荷物は結局ギンに持たせた。メイドなのだから当然だ。それくらいしてくれなきゃわりにあわない。

「うーん、おなかすいたし何か食べない？実はあたしなにも食べてないんだよね・・・朝から・・・」

「え？どうしてですか？」

「うん・・・・実は起きたのが昼で・・・朝も昼も食べてる時間なかったんだ。ほら、誘っておいて遅刻するわけにもいかないし焦

ったよ」

「意外とドジなんですね」

「はぐあ！か、香木原さんツッコミに容赦がないね・・・・」

「はい？」

ツッコミ・・・って、何ですか？

「まあいいや、付き合ってよ？あたし好きなんだ」

レンが立ち止まり振り替える。彼女の頭上にはハンバーガーショップの看板が立てられていた。
ハンバーガーなんて食べた事がないので未知の世界だ。普段の私ならば怖気づいてしまいそうなものだが今日は違う。
レンがいて、ギンがいる。それにもう、いちいち怖気づく程この空気に不慣れでもなくなっていた。

「いいですよ」

「きまりっ！それじゃ早くしよう！おなかすいちゃって！」

駆け込んでいくレンを見ていると胸が温かい気持ちで一杯になる。
彼女の居ると自分の存在が癒されるような気がする。
そんな風に呆けていたのだろう。隣に立っているギンが私の顔をずっと覗き込んでいた。

「な、なによ」

「いえ、何でもありません」

「あなたのそういうところがねえ・・・」

「二人とも早くしてよー！」

ギンの眼前に人差し指を突き出し今からまさに文句を言おうというタイミングでレンの声が聴こえた。
ギンは私の指をフイっと無視してそのまま店内に入っていく。あの態度、絶対に私をお嬢様だとは思っていない。
しかしまあいちいち怒っていてもきりがない。それでも私はやっぱりギンのことが・・・。

「・・・・・・・・嫌いだ」

ハンバーガーショップに入る。店内はわけのわからない空間だった。
あっけに取られる私の手をギンとレンが取る。
私は苦笑して店内に深く、一歩を踏み出した。

「お待たせ」

サツイノカゲ／ゲカノイツサ（前書き）

そろそろ本編。一話毎がだんだんながくな～る～。

サツイノカゲ／ゲカノイツサ

走っていた。あの屋敷の中を。暗い暗い廊下に差し込む月明かりと格子の影。どこまでも彼女を翻弄する。
手を引いて走っていた。誰かがそこで彼女と共に。少女は誰かに手を引かれるまま、足元を眺めながら走っている。
だから前に誰が居るのかはよくわからなかった。ただ走って走って彼女たちにとっては迷宮のように広いそこから逃げ出そうとしている事は確かだった。
少女は顔を上げる。自分の手についている鮮血。そして手にはまだ無骨なナイフが握り締められていた。
振り返るとそこには死体の山。多すぎるそれら全ては切り刻まれ、全てがつい先ほどまで生きていた温もりを有している。
少女は目を細める。あれだけ殺してしまって自分はのうのうと生きていていいのだろうかと？
もしもこの世界から自分が消えてしまえるのならば、もういっそのこと消えてしまいたいと。
うんざりなのだ。これから先も永遠にこんな悲しいことが続くのならば、いっそのこと全て忘れ去ってしまいたい。
全て忘れ去って・・・・・そう、永遠に・・・・。

月に翳したナイフ。それを首筋に着きつけ、少女は目を閉じた。

サツイノカゲ／ゲカノイツサ

Ｓｉｄｅ：ＲＥＤ

警察に二度目の取調べを受けることになったのは、前回の取調べがあった翌日の事だった。
部屋までわざわざやってきた刑事は俺と死んだ女性の関係について何度もしつこく聞いてきたが、それはもてなす側ともてなされる側の関係、としか言うことができない。
先日ビルから飛び降りた高校生の少女・・・彼女は俺の知り合いだと後々しった。無論、一瞬で頭部は砕け散りグロテスクな肉片に変化していたため一見しただけでは誰だか判断出来なかった、という理由もあるが何より俺が彼女を彼女だと判別できなかったのはもう一年以上会っていなかったから、という理由が大きいだろう。
その事はつまり彼女と俺があまり関係がないことの裏づけでもあるが、関係者曰く彼女は俺にほれ込んでいたらしい。そういえば一年くらい前までは随分頻繁に店に遊びに来てくれていたような気がする。無論、その時は高校生だ何て思わなかったわけだが。
彼女との関係はそれだけの事だ。だというのに警察がまた自宅にまでやってきた理由・・・それは同様の人死にが再び発生し、その死んだ女性がまた俺の客だった、ということだ。
写真を見る限り俺はその顔に多少の覚えはあったものの、名前までは覚えていない・・・そんな恐らく一見さんくらいの関係のはずなのに、何故また俺のところに取り調べに来るのか。
刑事は何度も俺に話を聞いたが答えることは同じ。お決まりの『何か思い出したら連絡してくれ』を言い残して去っていった。
無駄なことに時間を費やしてしまったとしか思えない。玄関の鍵まで丁寧にかけてやった。溜息をついてダイニングに戻るとそこでユカリが寝こけていた。
普段は冷静というか、ある意味淡白な態度を取るユカリだったが、眠っている時だけはかなり幼く見える。ソファに座ったまま、その

手からは本が転げ落ちていた。
隣に座って腕を組む。二人目の死者もやはり飛び降りだったらしい。
俺が聞いた事はただそれだけであり、そして二人目も昨日の俺の外出時間に合わせて上から降ってきたのだという。
俺はその騒ぎに気づかないまま通り過ぎ、そして帰宅した。ただそれだけのことなのだが。
いや、俺には関係ない。たまたま両方俺の客だったそうだがそれがなんだというのか。死とはなんら関係のないことだ。
隣で眠っているユカリの髪を指先で撫でる。少しクセのあるその神は柔らかくてなんだかふわふわしている。いつも外見には無頓着で寝癖がぼさぼさなのに、今日は比較的髪も大人しかった。
一体毎晩何をしているのか知らないがいつも疲れた顔で朝になると眠っているユカリ。その頬を撫でる。何となく立ち上がり、正面から顔を覗き込む。
小さく寝息を立てていた。長い前髪が目元を隠しているがお陰で一見しただけでは寝ているのかどうかよくわからない。寝ている間大人しく見えるのは多分慣れている俺だけであり、この状態でも一般人からするとちょっと近寄りがたく見えるだろう。
そう、ゆかりというのはそういう雰囲気のある女だった。近寄りがたいというか、なかなか距離感のつかめない女だ。近いわけでもなく遠いわけでもない。
だから本気で好きになる事も無ければ本気で嫌いになるわけでもない。俺と彼女はそういう距離感を大事にしていた。
何にせよ人間関係というのはどちらの方向であれ本気になった瞬間融通が利かなくなる。他の女と喋ってるだけで嫉妬したり、それはこちらもそうだったり。かと思えば嫌っていると顔をあわせるだけで正論かどうかも判断出来なくなり周囲を巻き込んだり。
面倒な生き物だと思う、人間と言うのは。だから俺はこの仕事がそこそこ鬱陶しく思うし、ユカリみたいな軽い女だったらいつまでも一緒に居られるような気もしている。いや、軽いというよりは・・・

実体のない存在、とでもいうのだろうか。
仮に幽霊と言う生き物が存在するとしたらきっとこういう生き物なのだろう。無論、幽霊である時点で生きてはいないのだが。
そっと顔を近づける。寝息と共に甘い香りが鼻を擽る。目を細め、唇に近づいていき・・・やはりやめた。
立ち上がってポケットに手を突っ込む。隣に座って溜息をつくと眠っていたはずのユカリが俺の手を取って笑っていた。

「今、キスしようとしたでしょ？」

「やっぱり起きてたか・・・・・」

そう、近づいて見たらなんとなくだが・・・本当になんとなく、カンで起きているような気がしたのだ。
いや、恐らくは俺が髪に触れたりするまでは完全にブレーカーが落ちていたのだろう。なんだか起こしてしまったようで申し訳がない。

「何でやめるかな・・・・僕が嫌がるとでも思った？」

「お前は誰とでもキスしそうだからそれはない。それよりアレだ・・・・警察はもう帰ったぞ」

「あぁ・・・・ごめんね、僕警察大嫌いなんだ。国家権力ってなんか鼻につくじゃない。特に警察はきらい。ちっとも役に立たないし」

「それは同感だ・・・・なんで俺みたいに全然関係ない人間を取り調べるんだか・・・もっと他にやることあるだろうに・・・」

「ねえ、殺したのはクレイじゃないんだよね？」

「当たり前だろ」

真顔でそんな事を訊かれるとは思っていなかったので思わず苦笑してしまった。
ユカリは心底真面目そうな顔で俺に顔を寄せる。

「うそ、ついてないよね？別に僕は怒らないよ・・・クレイが人殺しでも全然気にしない。だからうそつかないでね？」

「まず、その発言がどうかと思うが、そして俺は人は殺してない・・・・・・」

「・・・・・・・・そっか。僕も殺してないよ。目を見ればわかるでしょ？ね？」

わかったから顔を近づけるな。ぐいぐい近づいてくるのでこっちもぐいぐい引き剥がすと何だか奇妙な取っ組み合いになってしまった。それが解除されるとお互いに溜息をつく。ユカリはもう別の思考に移行してしまったのか、上の空に何か独り言を呟いている。
こいつの思考はすぐに別のことに切り替わってしまうのでよく支離滅裂になる。それは性格的な問題なのだと思っていたが、もしかしたら何かの病気なのかもしれない。
もう全く何も関係の無い話題に唐突に話の途中でも切り替わる。こいつの異質な雰囲気はそうした空気の読まなさからもくるのかもしれない。

「ねぇクレイ、今日から僕が一緒に寝てあげよっか？クレイ最近いつもうなされてるし」

「ああ・・・・そうなんだ・・・・って、何で知ってる？」

「起きるまでずっと見てたから」

「お前なぁ・・・・」

「知り合いにいい私立探偵が居るんだけど、紹介しようか？」

また切り替わった。俺は何のことかわからず首を傾げる。何故私立探偵を紹介されなくてはならないのだろうか。
ユカリは目を細め無邪気に笑う。肩を寄せ、頭を俺の肩に乗せながら囁く。

「まだあの悪夢、見続けてるんでしょ？」

悪夢。
俺がずっと見続けている巨大な洋館の夢。主人公はいつも俺ではなく、見覚えのある少女。
そこで起こる様々な事。それはどれも色濃く血の匂いを引き連れ頭の中に颯爽と現れる。それから逃れる手段はない。
毎晩というほどではない。何かあればまるで記憶を思い出すかのようにそれはゆっくりと再生される。少女が暴行される様子や拘束され部屋に監禁されている様子。あるいは少女が人々を殺戮して周る様子。
俺の頭の中で繰り返されるそれは夢と片付けるにはあまりに現実味があり、そして俺はそれをどこかで見ていたような気がしてならなかった。
そんな話を以前に一度だけユカリにもした気がするが・・・恐らく今日うなされていたのを見て思い出したのだろう。記憶力のいいやつ。

「現実に存在するかもしれないよ？もしそうだとしたら・・・行ってみれば何か思い出すかもしれないし」

「そんな僅かな情報で場所を探り当てられる人間なんているかよ・・・それに俺は金は・・・まあるが」

「はいこれ住所と電話番号。いきなり尋ねちゃっても大丈夫だと思うよ」

いつから書いていたのだろうか。俺のセリフを最後まで待たないうちに手の平に紙切れを握らせ、にっこりと微笑んだ。
それから立ち上がって部屋を出て行く。思わず呼び止めるとユカリは手をヒラヒラ振りながら何も言わず去っていった。
全く持ってわけのわからないやつだ。まあ、何にせよ・・・・あの洋館のことは一度調べてみたいと思っていたのだが。
とりあえず電話をかけてみるが、通じない。仕方ないので部屋を出た。休日の昼間だが、探偵というのは休日でも営業しているものなのだろうか。
そもそもそんな職業で今時食っていけるとは思えないのだが・・・・まあいいだろう、行くだけ行って見るのも一興か。
何せよ場所は非常に近かった。同じ街の端っこか駅前かというだけの違いだ。もらい物のバイクを突っ走らせてそこまで三十分かからない。
しかし俺のイメージしていた場所とそこは随分と違いがあった。丁寧なことに地図まで書いてくれたユカリだったが、最初から書いてくれればいいのに。

「アパートですってな・・・」

それは古ぼけた木造建築だった。正直言葉を失うような場所だ。俺

が住んでいるマンションとは天と地ほどの差がある。
一歩足を踏み込むとそこには巨大な木が立っていた。何の木なのかは一見しただけではよくわからない。何せ真冬だし俺はそういうのには興味もない。
とりあえず記されている部屋番号のところに向かう。二階のえーと・・・ここか・・・。
何の変哲も無い一室だ。とてもじゃないが優秀な私立探偵の住んでいる場所には見えない。仕方なくノックするが、返事もなかった。
何度かソレを繰り返し、完全に無駄足だったかと思い始めると一階、庭のほうから声をかけられた。

「あのー、今その部屋の住人は学校に行っているので外出中ですが・・・何かご用ですかー？」

学校？何で学校？というか学生なのか？
振り返る。そこには管理人と思しき女性が竹箒を片手に手を振っていた。何だか頭の悪そうな顔をしている。
階段を降りると一礼して迎えてくれた。俺も会釈して声をかける。

「あの、学校に行ってるっていうのは？」

「はい、部活動だそうで」

「部活動！？」

何歳なんだ・・・・とにかく俺が想像していた探偵とは随分と違うようだな・・・。
管理人の女性は随分と若そうに見えた。ボロいアパートとは言え、一人でやっているのなら大変だろうな・・・何て事を考えながら横を通り過ぎる。

「それじゃまた改めます」

そうして頭を下げたときだった。

「あのー、もしかしてカナタさんのお知り合いか何かですか？」

そのカナタさんというのが誰だか知らないが、もしかしたらユカリの言っていた探偵なのかもしれない。振り返って管理人を見つめる。ここは正直に全部事情を話した方が早いかもしれない。そんなわけでここに至った経緯をかいつまんで話すと、管理人は無駄に豊富な胸の前で腕を組んで首をかしげた。

「それは多分カナタさんのことだと思いますけど・・・もう三年くらい前からここには住んでないんですよ？今ここに住んでるのはオレオレ詐欺にあって、ギャンブルで大負けしたご老人が一人と、あと学生さんが二人だけですから」

「そのカナタってのは今はどこに？」

「駅前の事務所に住んでると思いますよ。場所、教えますね」

駅前ってことは・・・なんだよすごく近かったんじゃないか？思いっきり遠回りしてしまった。

記された場所はすぐに分かった。普段は行かない場所だが、行き方どころか部屋から見えるくらいだ。

「ありがとうございます。それでは」

「あの～・・・？」

振り返った。管理人は不安そうな表情で俺に近づくと、真剣な目つきで言った。

「ここを尋ねてくる人・・・特にカナタさん関係の人ってみんな大変な事情を背負ってるんですよねえ・・・あなたも頑張ってくださいね」

「は、はあ・・・？」

一体何のことだかさっぱりわからなかったが頭の緩そうなこの女の事だ、俺にはどうせ関係の無いことを言っているのだろう。
適当に切り上げてバイクにまたがるとまた駅前を目指して走り出した。そしてまた三十分近くが経過する。
オフィス街の一角にそれはあった。余り高級とはいえない古ぼけた雑多なビルの三階。確かにそこは事務所には事務所なのだが、とてもじゃないが優秀な私立探偵の城には見えない。

「まあアパートよりは幾分かましか」

扉を開いた。そこには書類や本が乱雑に散らばっており、とてもじゃないが客を迎える様相には見えなかった。
部屋の中央にあるデスクにはスーツ姿の男性が座っており、パソコンを片手で操作しながら何か物思いにふけっていた。
俺が入ってきた事に全く気づいていないのか、男はあくびをしてから立ち上がり、部屋の隅にある冷蔵庫からドーナッツを取り出して振り返り、

「ん・・・・いつから居たんだ」

と、俺を見て言った。

「ようこそ片瀬探偵事務所へ。ドーナッツくらいしかないが食べるか？」

「じゃあいただきます」

隅にあったテーブルで二人でドーナッツを食べる。男の髪は全体的に長い。特に整えているわけでもなく、服装もだらしが無かった。それにいくらどう見ても俺の方が年下とは言え全く敬語を使う様子も畏まる素振りも見られない。

「それにしても、男の子だったんだな。随分と可愛らしいから女の子かと思ったよ」

「よくいわれますけど男ですよ、俺は。残念ながらね」

「さてと・・・・仕事の話だけど、とりあえずお前さんからの依頼を請けるわけにはいかない」

まあ、薄々そんな気はしていたが理由くらいは聞かせてもらいたいものだ。

男はそんな俺の気配を察知したのか、苦笑してコーヒーを口に含んだ。

「そう怖い顔をするなよ。俺としてはどんどん依頼を受けたいところなんだけどね。実は俺はただの事務員であって、探偵ではないんだ。ここの探偵さんは今出張ってて帰ってくるのは多分明日か明後

日くらいになる。で、その探偵が気に入った客の仕事しか請けられないんだよ」

もうどう考えてもこの事務所の主は変わり者だとうとしか思えなかったがいよいよ事実そうだったらしい。どうリアクションすればいいのだろうか。

さっさと帰るべきか話を最後まで聞くべきか悩んでいると男性は足を組み、それから俺をじっと良く見つめ言った。

「話くらいは聞いてみようか？それで俺のほうから話して見て気に入るようだったら折り返し連絡を入れる・・・それでどうだ？」

「・・・・わかりました」

そんなわけで俺は夢の内容、そして自分の現状をかいつまんで報告した。

最近の飛び降りがどうこうという話は省いておいた。現場から近いここならば知らないという事はないだろうし、俺は事実関係ないのだから。

最初はどうでもよさそうに話を聞いていた男だったが、内容が深くなるに連れ深刻そうな表情を浮かべ、最終的には手帳に記録までし始めた。

どう考えても彼の態度が変化してきている事に内心違和感を覚えたわけだが、とりあえず最後まで語り終えることにした。

「・・・・・あんた、その洋館とどんな関係があるんだ？」

話が終わるとほぼ間髪入れず質問された。だから俺は正直に答えることにした。

「知りません。だから知りたいんです。俺、記憶喪失なんで」
俺の告白に彼は一瞬だけ驚いたようだった。それから何かに納得したように笑う。
「成る程。そんな風には見えないけどな・・・だが、その件だったら多分そう時間もかけないうちにあんたに報告出来ると思うよ」
「・・・どうしてですか？」
「もう調べてるからだ。それを調べにうちの探偵は今出かけてるところなんだからな」
あっけらかんと彼はそう言った。俺は意味がわからなくて言葉を失っている。
それを調べに今出かけている？まさか先にユカリが連絡でもしていたのだろうか？帰ったらそれは問い詰めるとして・・・。
だがそういうことなら話は早い。面倒な事もなく、あとで連絡が来るのを待つとしよう。
「それじゃ、これちゃんとした連絡先。君がかけた電話番号、多分古いやつだ」
名刺を受け取り立ち上がる。もうこれ以上ここで話す事は何もない。向こうもそうなのだろう、ポケットに手を突っ込んだまま入り口まで見送ってくれた。
「それじゃ、よろしくお願いします」
「よろしくお願いされます、っと。気をつけて帰るんだぞ」

笑っている。
事務員さんも十分変な人だと思った。

Ｓｉｄｅ：ＢＬＵＥ

「殺人依頼サイト？」

屋上で携帯電話を弄っている少年に思わず私は聞き返していた。
休日が楽しかったせいかあっと言う間に終了し、ブルーマンデーどころかこれまた楽しみにしていた一週間の学校生活が始まった。
朝教室に入って友達に挨拶するという事の何と幸せなことだろうか。
そしてお昼に誘われる事の幸せは・・・ああっ！！
と、冷静さが自分のいいところだと勘違いしていた私としてはちょっとなんというか異常事態というか・・・とにかく私たちは屋上に向かった。
そこで合流したのは先日顔をあわせた別のクラスの少年・・・名前は相田宗佑（あいだそうすけ）というらしいが、みんなアイダと読んでいる。イントネーションが違うようだが、まあ苗字である事には変わりないので私もアイダと呼ぶ事にした。
そんな彼が携帯電話を弄りながら言ったのだ。

「なあ、殺人依頼サイトって知ってるか？」　と。

無論私はそんなものは知らない。知らないどころかそもそも携帯電話を所持していない。
レンはそれを知っていたのか、口元に指を当てながら首をかしげ、

「それって都市伝説っていうか・・・噂でしょ？なんか依頼した人間を殺してくれるっていう」

レンは私にも分かるように丁寧に説明してくれた。
レン曰く、その殺人依頼サイトが誕生したのは半年ほど前らしく、サイトの内容としてはただ文字を入力できるスペースがあり、他は何もない漆黒の画面なのだという。ただそこの文字入力スペースに殺したい相手とその殺したい理由を書き込むと、相手が何者かの手によって殺されると・・・そういう内容らしい。
正直それを聞いた時私は馬鹿馬鹿しくてあくびが出そうだった。そんな都合のいい話があるわけがない。だが噂が流行るには何かしらの理由は必要だ。

「流行った理由は簡単だぜ？なんか、本当に依頼されたやつが何人か死んだらしい。それが急に流行って、まあ今に至ると」

「ただの偶然ではないですか？信じる根拠としては不十分だと思いますけど」

「別に信じてるとは言ってないだろ・・・そんなおっかない顔すんなよ香木原・・・」

「それでその殺人依頼サイトがどうしたの？アイダ」

「いや・・・・噂に聞いたんだけどな・・・こないだ本当に死んだらしいんだよ。依頼されてた子がさ・・・高校生なんだけど」

馬鹿馬鹿しかったが最後まで聞くことにした。その依頼をしたのはクラスメイトで、男性関係で揉めていたらしい。で、殺人予告サイ

トにメッセージを送った翌日、少女はビルから飛び降りて不可解な死を遂げたと。
確かに若者が騒ぎそうな話題だが、個人的にはやはり信憑性にかけると思った。しかしレンはそうではなかったらしく、腕を組んで言った。

「それ、昨日ニュースで見たかも・・・・それにあの街、あたし割と無関係じゃないっていうか」

「そうなんですか？」

ニュースなんて全く見ない・・・というかテレビなんか全く見ないからわからないけど。
私の場合テレビがどうしても見たいなら電気屋の前にしばらく突っ立っている必要があるし。

「無関係じゃないどころか・・・あたしあそこに昔住んでたもん」

「あー・・・そういやお前引っ越してきたんだったな。そっかそっか、前にあそこに住んでたのか」

「うん・・・なぁんかいい気はしないなあ・・・それに流行るってことは余程みんな死んでもらいたい人が多いんだろうなあ・・・」

「そうでしょうか？人の心理なんて単純ですから、明確な殺意が無くともそういう『曖昧な噂』には飛びつきたくなるでしょう。むしろ本当に死んでもらいたいと願ってそういうサイトに行く人は少数派だと思いますよ？本当に殺意があるのなら、むしろ自分でやりたいと思うはずですしね」

最後のは個人的な意見だった。殺人と言うものは出来れば自分ではやりたくない、やってはいけないと思うのが自然だろう。
しかし言ってしまった後の祭りというやつで、もうその言葉は撤回できる雰囲気ではなかった。しかし二人とも特に気にしている様子はなく、安堵する。

「俺は流行とか詳しくはねーけど、こういうのが流行るってのは世の中なんか終わってるってカンジだよなあ～」

紙パックのコーヒーを飲み干してアイダはフェンスに寄りかかって空を見上げた。つられて全員で空を見上げる。
そうして何故そんな事を言ってしまうことになるのか自分でもよくわからないが、とにかく私はそういってしまっていた。

「そのサイト、見てみませんか？」

「え？」

二人が同時に声を上げた。だって仕方ないじゃないか。本当かどうか気になるし、それに・・・もしかしたら、という気持ちもある。
もしも、仮に・・・どうかしてしまったとして、偶然・・・・そう、奇跡的にそれが事実だとしたならば・・・・。
携帯電話を持っていない私ではそれを確認出来ない。だから必然的に彼らのそれを借りることになる。
二人はどうせ渋るだろうと思っていたが、比較的何も考えていなさそうなアイダ君はあっさり了承してくれた。

「まあそこまで言うならいいけど。ほら」

そこには言われていた通り、サイト名すら記入されていないただの

入力スペースだけのページが表示されていた。私は携帯電話をうち・・・・うち・・・・？

「これ・・・どうやってつかうんですか？」

二人が同時に転んだ。真顔で聞いてしまったが、これってもしかして凄い変なことなんじゃ・・・いや考えなくても変なことなんじゃ・・・。

は、はずかしい・・・・そっか・・・・携帯電話を使えない女の子なんて普通いないのか・・・・くうう・・・。

アイダに一通りの操作説明を受け、いざスタート。入力するに妙に時間がかかり、両手で懸命にそれを向き合っていると二人もなんだかおかしくなってきたのか、笑いながら私の様子を眺めていた。

そうして事情を書き終えた私だったが、肝心な殺して欲しい相手の名前が思いつかなかった。あの男とか父親とか言ってはいるものの、名前がはっきりしない。

メイドのほうもギン、とは聞いているけれどそれが本名とは思えないし、どうなのだろう？これは本名を入力したほうがいいのだろうか。

いや、そりゃそうだろう。せめて人物名くらいは特定できなければ。しかし全く名前が思いつかない父親と『ギン』と・・・どちらを記すべきなのか。

「あ、そろそろ昼休み終わるわ・・・戻るぞ、香木原」

「は、はい」

携帯電話を閉じてアイダに返した。とっさのことだったので私は短い二文字の名前を入力してしまった。

メイド。我が家で働く彼女。その呼び名。私がずっと知らなかった

名前。
でももしこれで彼女が死ねばこんなに嬉しいことは無い。全く期待していない表装の自分と、死ねばいいのにと願う深層の自分がいた。そそくさと去っていくアイダに続き私たちも屋上を後にする。その途中、レンは振り返っていった。

「香木原さん、本当に殺したい相手がいるんだね」

「え・・・・・その・・・」

「・・・・・・・・そっか・・・・そうだよね」

憂鬱そうな、寂しげな表情を浮かべそれからレンはいつもどおりの人懐っこい笑顔に戻って私の手を引いた。

「ホラ、早く戻ろうよ？」

「・・・・・・・・・うん」

その時のレンの寂しそうな表情の意味を私理解出来なかった。
そして彼女のことをより知った時、その意味を理解した時、

私は自分の殺意の影に怯える事になるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4111d/

久遠の鏡

2010年12月25日02時40分発行